俄 Anglist の記——エッセン大学英語科の CALL 教育をつぶさに見て

境　一　三

2002 年の 4 月から 1 年間，エッセン大学の英語科に潜り込み，俄 Anglist になりすまして生きてみた。これがなかなか面白かった。

なんでこんな暴挙に出たか。理由は二つある。ここ 10 年ばかり Computer Assisted Language Learning，略して CALL に関心を持っている。もう一つは，日本の外国語教育の惨状を見るにつけ，教員養成を何とかしなくてはという意識が自分の中でとみに高まっていたということがある。この二つを合わせて，外国語の教員養成がきちんと行われている現場を見てみたい，そしてそこで CALL がどうやって扱われているのかを知りたい，と思っていたのだ。そうした折に運良く勤務先から 1 年のお暇をもらうことになった。行き先はエッセン，Bernd Rüschoff 教授にお世話になることにした。彼とは 2000 年に広島大学のワークショップで知り合った。英語教育学の専門家で，しかも現在ヨーロッパ最大の CALL 学会である EUROCALL の会長である。願ってもない環境だ。

エッセンの英語科では，ドイツの語学・文学系学科の常としてほとんどの学生が教員志望だから，英文学，英語学以外に自ずと英語教育学も学ぶことになる。Bernd Rüschoff はこの Didaktik の正教授である。彼のもとではドイツ人以外に米国人，英国人，アイルランド人が教鞭を執っている。英語教育学もしくは応用言語学の授業のテーマは多岐にわたるが，CALL 関係の授業も毎学期提供されている。ここ数年の実際の授業科目をいくつかランダムに挙げてみよう。

- New Technologies and Language Learning
- Landeskunde & computergestützte Lernprojekte im Englischunterricht
- Creating Webspace : Internet und WWW-Projekte im Englischunterricht
- A Virtual Resources Centre : Creating an interactive learning environment on the WorldWideWeb
- Corpus Linguistics & Language Learning

このように一見して CALL を扱った授業と分かるもの以外に，英語早期教育についての授業の中では，こども向けコンピューター教材なども扱われている。英語教育のさまざまな分野で，CALL がすでに当たり前の Bestandteil として考えられていると言っていいだろう。

日本でも CALL は行われている。しかし，どれだけ外国語教育学のコンテクストで扱われているか。CALL に携わっている人の多くがまだ単なるコンピューター好きの教員であって外国語教育の専門家ではない。素人が ad hoc に CALL に携わり，仕事が組織化されずまた学問となっていない。しかしアングロ・サクソンの国々ではもちろんのこと，ドイツ（そしてその中の DaF）においてさえ，CALL はすでに外国語教育学の一部をなす分野として確立している。だから，CALL の専門家は当然きちんと外国語教育の流れが分かっているのだ。

ドイツでの CALL はしたがって外国語教育の先端と呼応している。CALL 研究でも Projektunterricht や Handlungsorientierter Unterricht がテーマとなっているし，コンピューター中心の CALL から，マシンで展開する部分を対面授業といかに組み合わせるかという blended learning に関心が移行している。要するに，機械任せの（往々にしてコスト削減ための）CALL は遠隔教育を除いてもうパセなのである。

こうした状況が学生の卒論や博論にも反映している。CALL 学の未発達な日本では，博論はおろか修論でも CALL をテーマとしたものはほとんどないが，ドイツではこの分野で多くの学生が鎬を削っている。エッセンの Doktoranden のテーマを挙げてみよう。曰く Digital Divide and English Learning，曰く E-mail Project，曰く Early Learning and CALL などなど。

さて，おいてけぼりを食っている感じがするのはぼくだけかな？

（慶應義塾大学教授）